

日本人成人学習者の英語学習過程

How do Japanese adult learners study English?

藤井明子

東京福祉大学

Fujii, Akiko

University of Tokyo Social Welfare

Reference Data:

Fujii, A. (2015). 日本人成人学習者の英語学習過程. [How do Japanese adult learners study English?] In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *JALT2014 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

本稿の目的は、日本人成人学習者の英語学習過程でどのようなことが起こっているのか探ることにある。TOEIC受験など特定の目的ではなく英語習得そのものが目的であると思われる日本語で出版されているランゲージ・ラーニング・ストーリー15点を対象とした。その結果、言語目標を達成した学習者では学習初期の上達しない時期を経て、転換点を経験し、その後自己管理型の集中学習を数年間にわたって続けている者がいることがわかった。さらに、10年単位で学習を継続し、期待されている自己像 (ought-to L2 self) によって強い動機づけをしている者がいることも明らかになった。筆者自身、成人英語学習者であり、長い年月をかけて英語学習を続けてきたが、このような例は今回の調査対象の中ではよく見られるケースであることがわかった。本稿の目的は、日本人成人学習者の英語学習過程でどのようなことが起こっているのか探ることにある。

The aim of this study was to understand how Japanese adult learners learn English. Fifteen Japanese adult learners' stories published in Japanese, excluding learners studying English for specific purposes such as taking the TOEIC, were collected and analyzed. These adult learners experienced a period in which they did not feel they had made progress, then came to a turning point and found a better way to study English, which they focused on for at least a year. They continued studying for at least 10 years and were motivated by their "ought-to L2 self." An adult learner herself, the author found that it was usual for adult learners to continue studying over the long term in order to achieve their goals.

筆者は、20代初め、NHKの英語学習番組を聴くことから英語学習を再開し、時には個人教授を受けながら、英語学習を継続してきたが、英語でコミュニケーションができるようになるまでに長い年月がかかった。同様の経験を積み重ねている成人学習者に出会うことがなかったので、ほかの学習者がどのような経験を経て、英語学習の目標を達成しているのか、どのくらいの期間をかけて英語を習得したのかなど知りたいと思い続けていた。

そこで今回の調査では、日本国内で出版された成人学習者の英語学習体験記を収集し、それぞれの学習者が学習目標を達成するまでの期間、また、学習の動機づけについて明らかにすることにした。本稿では、日本人成人学習者の体験を分析し、どのような学習過程を経てきたのかを記述したい。

先行研究

成人学習者の第二言語習得に関しては、研究者自身のポルトガル語習得研究であるSchmidt and Frota (1986)、英語圏移住者のランゲージ・ラーニング・ストーリーを調査したBellingham (2004)、成人の語彙学習に関する研究(Sanaoui, 1995)、学習者の年齢と第二言語習得に関して誤って認識されている点を指摘した研究(Harionva-Todd, Marshall and Snow, 2000)などがある。Shoaib and Dörnyei (2004)では成人の英語学習動機について分析しており、“Moving into a new life phase” (p. 32 新しいライフステージへの移行:筆



者訳)によって学習者は、将来のキャリアを見据えて、言語学習に特定の目的を持つようになるとしている。確かにTOEICのスコアアップや昇進のために英語学習をしている日本人成人はこれにあてはまるであろう。しかしながら、例えば、角元(2010)では、英会話講座で学んでいる成人学習者の学習動機は、「英語・英会話を学んでいると楽しいから」(74.2%)が最も多く、次いで、「外国へ旅行・観光のため」(60.0%)、「英語圏(アメリカ・イギリス等)の文化に興味・関心があるから」(57.4%)、「講座担当の先生と英語でコミュニケーションをはかりたい」(47.9%)と報告されている。このように、日本における成人英語学習者の多くは実利的な目的で語学学習を行っているわけではないので、日本人成人の英語学習過程を探るためには先行研究とは異なる視点から学習者の実態を個々の事例に沿ってみていく作業が必要になると思われる。日本人成人学習者に関してその実態を調査した報告には、岩田(2013)、角元(2010)、原(1993)などがあるので、このような実態調査を参照しながら、収集したラーニング・ストーリーを分析していくこととする。

方法

成人学習者の学習過程を知るために、日本語で出版されている体験記15点を収集した。収集対象はTOEICや資格試験受験が目的ではなく、英語そのものの習得を目的として、高校大学を卒業後、英語学習を再開した日本人成人の体験記で、日本国内で公に出版された書籍とした。収集した書籍の出版年は1996～2014年であった。表1が収集した15点の体験記一覧である。なお、再開後の英語学習歴の長い順に並べた。

表1. 収集した体験記一覧

学習者記号	執筆者(出版年)・書名・出版社
A	南和子. (2006). 女性の英会話. 東京:三笠書房
B	清川妙. (2006). 84歳. 英語, イギリス, ひとり旅. 東京: 小学館
C	勝間和代. (2014). 最後の英語やり直し. 東京: 毎日新聞社
D	川本佐奈江. (2012). NHKの英語講座をフル活用した簡単上達法. 東京: 祥伝社文庫
E	横森理香. (2007). 英語はしゃべったもん勝ち!. 東京: ヴィレッジブックス
F	兵藤ゆき. (2010). 英語と格闘 in New York. 東京: NHK出版
G	小林カツ代. (2001). アバウト英語で世界まるかじり. 東京: 集英社文庫
H	伊藤比呂美. (2005). レッツ・すびーく・English. 東京: 岩波書店
I	中尊寺ゆつこ. (2005). やっぱり英語をしゃべりたい!. 東京: 祥伝社
J	服部品子. (1996). なんて英語やねん. 東京: 山と溪谷社
K	木内麗子. (2010). 英語がペラペラになりました. 東京: メディアファクトリー
L	岸本周平. (2000). 中年英語組ープリンストン大学のわか教授ー. 東京: 集英社新書
M	バックンマクン. (2004). 小卒レベルのおれがラスベガスで英語で漫才ができた理由. 東京: 幻冬舎
N	小栗左多里. (2004). 英語ができない私をせめないで!. 東京: 大和書房
O	高せえり子. (2010). 英語できるかな?ーこれからでも間に合う英会話コミックエッセイ. 東京: 文芸春秋

体験記を執筆した学習者の基本データは以下のとおりである。

表2. 学習者の基本データ一覧

学習者記号	性別	学歴・学生時代の英語	英語再学習開始年齢	学習再開時の英語レベル	英語再学習の契機	再開後の英語学習期間	体験記執筆時点での英語到達レベル
A	女	大卒・英語は苦手科目	娘2人が小学生の時	入門	カナダ滞在	約35年	不自由なく友人と交流できる
B	女	高等師範学校卒・英語部所属	53歳	入門	海外旅行	約30年	1人で海外旅行ができる
C	女	中学1年で1か月米国留学。大卒時TOEIC420点	23歳	初級	外資就職	約25年	インタビューや翻訳もプロとして英語で行う
D	女	大卒・英語は普通に学校で勉強しただけ	32歳	入門	人生を変える	15年以上	ボランティアの通訳ガイドを務め、英語教室を開く
E	女	大卒・英語は得意科目	30歳	初級	海外旅行	約15年	周囲の外国人と英語で意思疎通ができる
F	女	高卒・英語は苦手科目	40代半ば	入門	渡米	11年	米国での日常生活に支障のないレベル
G	女	大卒・ミッション系の中高校で英語を勉強	30代か40代	初級	海外旅行	10年以上	海外旅行で困らない程度
H	女	大卒・英語は苦手科目	30歳過ぎ	入門	開始理由は不明・後に渡米	10年以上	米国での日常生活に支障のないレベル
I	女	大卒・英語は得意科目	30歳過ぎ	初級	海外メディアの取材を受けて	約10年	人前でスピーチやプレゼンテーションができる
J	女	大卒・英語は苦手科目	50歳	入門	人生を変える	約10年	大学の英語の講義が理解できる
K	女	大卒・英語は普通に学校で勉強しただけ	20代か30代	入門	留学・後に結婚	6年	簡単なビジネス会話ができる
L	男	大卒・英語は得意科目	38歳	入門	渡米	5年	国際会議に出席して政府代表として発言できる
M	男	高卒・英語は苦手科目	29歳	入門	ラスベガスでのショー出演を目指して	1年	ラスベガスでショーを行った
N	女	大卒・英語は得意科目	36歳	中級	将来の海外移住に向けて	1年	セサミストリートがわかる
O	女	大卒・中高校時代の英語の成績は中位	26, 7歳	入門	海外メディアの取材を受けて	3か月	短い会話を暗記して話せる

表3は英会話学校通学経験の有無など、英語学習の形態を示す。

表3. 英語学習の形態一覧

学習者 記号	英会話学校通 学経験	個人教 授受講	英語圏での長期滞在
A	○	○	3年(家族滞在)
B	○	○	×
C	○	×	数か月(ホームステイ・英語コース受講)
D	(英語サークル)	×	×
E	○	○	2年(留学・遊学)
F	×	○	11年(家族滞在)
G	○	○	2か月(ホームステイ・英語コース受講)
H	○	×	9年(家族滞在)
I	○	○	2年(留学・遊学)
J	○	×	1年(インターンシップ・留学)
K	○	×	5年以上(留学)
L	○	○	2年(大学客員研究員)
M	○	×	×
N	○	○	×
O	○	○	×

これら体験記を執筆した学習者は、女性13名、男性2名、英語学習再開年齢は23歳～53歳、英語学習歴は3か月～約35年間、体験記執筆時の年齢は28歳～84歳であった。なお、多くが年齢を公表していないため、平均年齢は出せなかった。英語学習歴は、英語学習を再開後の経過年数を示している。体験記の中で学習者が英語を使うことは常に勉強であると記述しているからである。英語学習中の職業だが、主にフルタイムで働いていた者が10名、専業主婦3名、留学・研修中2名であった。英語圏での2か月以上の滞在歴があった学習者は10名、滞在期間は2か月～11年間、滞りの目的は、留学が6名、家族の転勤・移住などが4名であった。英語学習再開時の英語レベルは、挨拶もできない入門レベル10名、簡単な単語や短文ならわかる初級レベル4名、語学学校で中級レベルと判定された1名であった。体験記執筆時の英語レベルは、短い会話を暗記して話せる者から仕事で英語を使う者までさまざまであった。

学習環境については学習者によって異なり、週に数回、多い場合は毎日英会話学校に通っている者もいるが、費用をかけている者ばかりではなく、

文法書を購入して暗記、NHK番組の聴取と地元の英語サークル参加、知人に英語を訂正してもらうなど費用をかけない方法を選択し、それが役立ったとした学習者も3名いた。

本稿では、収集した学習者のラーニング・ストーリーを分析することで、大学での単位取得や試験のスコアアップなどが目的ではなく、英語を実用的あるいは内的動機づけで学ぶ日本人成人英語学習者がどのような過程を経て英語を学習しているのかを記述したい。

結果と考察

学習者のプロフィール

まず、学習者のプロフィール例をスペースの関係で1例のみ掲げる。

学習者Bプロフィール

少女小説家で子育てを終えた。学生時代は英語が得意で英語部にも所属していたのに、53歳で初めて海外取材旅行に行ったところ、買い物もできなかった。ショックを受けて英語学習を再開し、まず近所の英語塾でグループレッスンを受けたが、2年経っても全く上達しなかった。英会話学校を代り、個人教授を受けるようになった。3年間通い、1回40分のレッスンを計400レッスン受けた。この結果、英検2級に合格した。その後、週1回個人教授を受けるようになり、10年以上続けた。65歳の時、初めて単身、海外旅行に。その後も、84歳(出版当時)になるまで、ほぼ毎年、1人での海外旅行を続けている。

次に、収集したラーニング・ストーリー分析の結果浮かび上がってきたキーワード「自己決定による集中学習期」「溝を越える」を中心に学習過程を記述する。

英語学習の再開

学習者J・Mは、中学1年の1学期に英語学習に挫折したと述べている。筆者もその1人だが、このように英語への劣等感を持って英語学習を再開した学習者がいる一方、学校時代、英語は得意科目だったと記述している学習者もいる(学習者B・E・I・L)。興味深いのは、教科としての英語得意・不得意にかかわらず、英語学習再開の時点ではほとんどが同じようなレベルだったという点で、語学学校で中級レベルと判定された学習者Nを除くと、入門レベル10名、初級レベル4名であった。各学習者の学習開始時の英語レベルについての記述を見ると、挨拶の仕方がわからなかった(学習者A)、海外の滞

在先で買い物などに不自由した(学習者B・F・L)、英語で道を聞かれて答えられなかった(学習者D)など、いずれもごく基本的な話すスキルが身につけられていなかったと述べている。初級レベルの学習者も、語学学校で初中級クラスに入れられた(学習者C)、海外旅行先で英語が思うように出てこなかった(学習者E)、海外旅行で必要最低限のこじか伝えられなかった(学習者I・G)となっている。

原(1993)のアンケート調査結果では、過去1年間に実際、英語学習をしたと答えた成人の内、59.5%が入門・初歩レベル、入門より高いレベルが26.2%と自己申告したことが報告されており、今回対象とした学習者とよく似た傾向を示している。

英語学習再開の契機について見ると、家族の転勤や自身の出向に伴う海外長期滞在(学習者A・F・L・N)、仕事に関連して(学習者C・L・M)以外は、海外旅行などで英語との接触があり、英語ができない自分を発見して英語学習を再開したことがわかる。筆者も海外旅行での経験が直接のきっかけとなって英語学習を再開している。これらの学習者は英語ができるようになるため、英語でコミュニケーションができるようになることが英語学習の目的であったと記述している。

英語ができない自分の発見が、英語ができるようになることで自分の人生が変わるのだという考えにつながり、人生を変えるために英語学習を再開した者に学習者D・Jがいる。このような動機づけの学習者については、Fentress(2014)でもアメリカでの体験として離婚したばかりの女性が人生をやり直すためのきっかけとしてフランス語を習いに来たエピソードとして語られている。

学習初期:なかなか上達しない

日本人の成人が英語学習を始めようと考えたとき、学習方法として選ぶ方法には、NHK番組の聴取、英会話学校などのグループレッスン、市販の英語教材の活用等が挙げられる。

NHK番組の聴取に関しては、原(1993)の調査でも今後英語を学びたい人の3分の1が放送を利用したいと答えていると報告されている。今回分析の対象とした学習者の内、NHK番組の聴取経験者は学習者D・I・J・Nで、NHKが役に立ったとしているのは、学習者D・Nである。学習者DはNHKの語学番組を継続して聴取し、英語サークルに参加したと記しているが、これはNHK番組聴取とカルチャーセンターの英会話教室参加という筆者の英語学習初期の体験とよく似ている。学習者Dも筆者も費用面を考慮して学習方法を選択したのだが、NHK番組聴取だけでなく、グループレッスンに参加することで、

仲間からの精神的なサポートを受け、学習を継続できた。Umino(2004)でもNHK番組聴取継続のため周囲の支援が重要であることが報告されている。

次に英会話学校に入って英語学習を始めた学習者であるが、グループレッスンに参加したものの、上達している実感がなかったと記述している者が多い(学習者A・B・E・G・I・J・N)。この時の体験について学習者Iは「時間が来たただ行くだけだから何の意味もない」(p. 54)と受け身の学習であったことを記述している。また、学習者Bは「なかなか上達しない自分にやきもち」(p. 14)していたと記述しているが、このように英会話学校に通い続けているものの、上達を感じられない期間は、長い者では数年間続いている。ただし、これらの学習者も後には自分に適した英会話学校や個人教授に巡り合っているため、英会話学校などが有効でないわけではない。また、最初から1つの英会話学校に通うことで英語を習得した学習者Mの例もある。

MMD研究所(2014)のオンライン英会話利用者に対するアンケート調査結果によると、93.8%が過去に英語学習の経験があったが、学習の継続率はわずか5.8%、英語学習を断念した理由は「通うのが面倒になったから」が46.1%と最も多いが、「成績が上がらなかったから」19.8%、「飽きたから」7.7%などの回答もあり、英語学習を思い立ったものの、上達が実感できないで学習を継続できずやめてしまう成人学習者は非常に多いことがうかがえる。

また、海外長期滞在だが、表3の通り多くの学習者が海外長期滞在を経験している。学習者A・F・Lは海外長期滞在が英語学習再開のきっかけだったと述べており、学習者E・H・I・J・Kは1年以上英語圏に滞在した経験を持っている。学習者I・J・LはESL環境にいたるだけでは英語は上達しなかったと記述している一方、学習者A・Fは英語圏にいる利点を生かして知人に英語を習ったと記し、学習者E・Kは語学学校に通いながら留学生仲間と会話練習をしたと記述している。Schmidt and Frota(1986)でも語学学校での学習と、友人・知人とインタラクションによってポルトガル語での基本的な会話能力が身に付いたことが報告されているが、語学学習の目標によって各学習者の達成感には異なるため、インタラクションの有効性を判断することは難しい。

転換点:追い詰められて

数か月から数年間なかなか英語が上達しない経験をした後、今回分析の対象とした学習者の多くは本格的に英語を学ぶようになる転換点を通過しており、よく似た表現を使って記述している。

学習者Cは英語ができないため仕事を干されてしまい、「追い詰められて、私は本格的に英語の勉強を始めることを決めたのです。」(p. 47)と述べているが、多くの学習者が一大決心をしたのはこのような実利的な問題では

なく、英語が上達しないことへの苛立ちからで、「思い切って、仕事を辞め、背水の陣で英語と対決しようか……。」(学習者J, p. 154)、「私には、もうこれが最後のチャンスで、ここでやめちゃったらあとがないというのがあった。」(学習者I, p. 62)、「何か義務的に英語を話さなければいけない状態に自分を追い込むしかない」(学習者L, p. 68)と考えたと記述している。これらの学習者に共通しているのは英語ができない自分のままで人生を終わりたいくないという焦りである。Dörnyei and Ushioda (2011)によると、“Ought-to L2 Self” (p. 86) そうなりたくない将来の自分像を描くことが学習の動機づけとなることがあるということだが、これらの学習者はこのような強い動機づけがあったことがうかがえる。

自己決定による集中学習期

本格的に英語を学ぶことを決意した成人学習者はいずれも、集中学習を選択している。英会話学校に通い1年目に40分間のレッスンを190レッスン、3年間で計400レッスンとった(学習者B)、英会話学校に通い1回1時間のレッスンを3年間受け続けた(学習者C)、英語の文法書4冊の完全丸暗記(学習者I)、短大に入学し、英語で行われる授業をとった(学習者J)、米国の大学で英語での講義を受け持った(学習者L)、1年間、毎日英会話学校に通った(学習者M)である。筆者自身は本格的に英語を学ぶと決意したことはないが、NHK番組を集中して聴取していた際には、複数の番組を録音し、多い時には1日3~4回聴き返していた。

このような自己管理型集中学習に必要な期間については、2年間(学習者I)、3年間(学習者B・D)、1000時間(学習者C)の記述がある。この期間は英語学習の基礎を作る時期であり、これら学習者はこの間に英語が十分上達したわけではない。「ゆるぎない基礎」ができた(学習者I, p. 39)、「赤ちゃんのバブバブ言葉が出る」(学習者D, p. 5)ようになった、英検2級合格(学習者B)などが達成されたことである。自己管理型集中学習の後も学習を継続している学習者は、共通して英語学習継続の重要性を記述している。学習者B・Mは1日も休まないとしており、学習者B・C・D・Iが英語学習には時間がかかることを強調している。今回分析の対象とした学習者の多くは10年以上英語学習を継続しており、辞めないことの重要性がうかがえる。

ところで学習が楽しいということは学習継続の動機づけになっていたのだろうか。英語学習自体が楽しかったと記述しているのは学習者B・Mで、楽しくなかったと振り返っているのは学習者Iである。学習者C・J・Lは継続しなければならない状況に自身を追い込み、それが動機づけとなったと述べている。自己管理ができる成人学習者の場合、一時的な学習の楽しさが主な動機づけとなっていたとは言えない。

上達の手応え:溝を越える

集中学習を行って、英語学習自体が楽しいと感じてはいても、流暢に話せるようになったわけではない。が、学習を続けていくうちに、自分が上達したと感じられる瞬間があったことを複数の学習者が記述している。

学習者Bは、学習再開11年程の頃、喫茶店で話している時、自然に先生と英語で話している自分を発見し、「溝を越え」(p. 23)たと表現している。学習者Iは、学習再開4年程後、アフリカの旅先で知り合った人と食事を楽しんだ体験を「私がやっとなあ、私ってちゃんと英語がしゃべれるんだ」って思った瞬間」(p. 182)とし、学習者Hも英語学習3年目、アジア圏への旅で同様の体験をしたことを記述している。

筆者の学習過程を振り返ってみると、英語をきちんと学び直してから6年ほど経って、中国で日本語を教え始めてから、同僚と英語で多少のコミュニケーションができることに気がついたことが思い出される。徐々に上達しているという自覚はなく、まさに「溝を越える」、ふと気づくと階段を1段上っていたという体験であった。

学習目標と達成されたレベル

最終的な学習目標である英語でのコミュニケーション能力には学習者によって違いが見られた。学習者Lのように「正しい英文法にはこだわりたい」(p. 55)という者は、揃って成人にふさわしい正確な英語を身につけることを強調している(学習者A・I・N)。他方、学習者Eは「困らない程度に英語が使いこなせればよいわけです」(p. 115)としており、同様の記述が学習者Gにも見られる。前者は文法学習は必要としている一方、単語を並べれば通じるという後者の学習者は文法学習は不要と述べている。ただし、何をもって文法学習とするのかは学習者によって異なり、学習者Iは基本構文の丸暗記を文法学習と呼んでいる一方、学習者Eは「多くのよく使う言い回しを丸暗記」(p. 208)することが重要であり文法学習は不要としている。

到達目標の相違は獲得された話す能力の違いに表れており、前者は、外国人・日本人の交流グループを主宰(学習者A)、公式な場面でスピーチ(学習者I)、国際会議に出席(学習者L)など英語でできるようになったことを記述しているが、後者にはこのような記述は見られない。また、リスニング力も同様で、前者はCNNを視聴して英語学習などに活用している(学習者I・L)と記述している一方、後者はCNNは全く理解できない(学習者E・G)としている。

まとめと今後の課題

学習者のラーニング・ストーリーを分析した結果、多くは試行錯誤の末、少なくとも1年間は継続できる自分に合った学習法を見出していることがわかった。10年以上同じ学習法を続けている学習者もあり、それは楽しいだけでなく、上達を感じられなければならない。また、英語学習を自らの生活の優先順位第一位と位置付け、集中して「サボるための弁解はけっしてしない」(学習者B, p. 89)で英語学習することを明記している。さらに、なりたくない自分(Ought-to L2 Self)像がはっきりしていた。また、学習の成果について、自分のできることが急に増えた感じがして、英語を通じて視野が広まり、人生がおもしろくなったととらえている。

筆者自身も時間をかけて英語を学習してきて、その時間のかかり方に疑問を抱き、今回の調査を行ったのであるが、学習目標を達成した学習者の体験ではいずれも10年単位の時間がかかっていた。

この調査の限界であるが、対象としたのは出版され、あらかじめ編集されたストーリーであり、また、一般成人に比べると恵まれた環境にあった学習者が多かったという点が挙げられる。さらに、学習開始時点のレベルおよび達成レベルは主観的な記述にすぎない。このような点を踏まえ、成人学習者の学習過程の一次データを幅広くより多くの範囲で収集し、分析していくことを今後の課題としたい。

Bio Data

藤井明子 (Fujii, Akiko) は、第二言語としての日本語を日本国内で外国人留学生に教えている。彼女は、成人英語学習者として英語学習を現在も継続している。

引用文献

- Bellingham, L. (2004). Is there language acquisition after 40? Older learners speak up. In P. Benson & D. Nunan (Eds.), *Learners' stories: Difference and diversity in language learning* (pp. 56-68). New York: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Motivation* (2nd ed.). Harlow: Pearson Education.
- Fentress, E. A. (2014, October 18). The divorcee's French class. OP-ED. *The International New York Times Asia Edition*.

- 原由美子. (1993). 「第4回学習関心調査報告 日本人の学習 '93—成人の意識と行動をさぐる—」. 『放送研究と調査』, 93(9), 2-31.
- 岩田京子. (2013). 「成人英語学習者と学習インフラストラクチャーに関する一考察」. 『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』, 45, 73-83.
- 角元 節子. (2010). 徳島市における生涯学習機関での英語学習に関する実態調査—英会話教室受講者へのアンケート調査より—. *TOKUSHIMA Regional Study* 『市民研究者フォーラム紀要』, 2, 3-18. Retrieved from <http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/staff/hirowata/kakumotoeikaiwa.pdf>
- Marinova-Todd, S. H. Marshall, D. B., & Snow, C. E. (2000). Three misconceptions about age and L2 learning. *TESOL Quarterly*, 34, 9-34.
- MMD研究所. (2014). 「オンライン英会話に関する利用実態調査」. Available from <http://chosaitmedia.co.jp/tags/英語学習>
- Sanaoui, R. (1995). Adult learners' approaches to learning vocabulary in second languages. *The Modern Language Journal*, 79, 15-28.
- Schmidt, R. & Frota, S. (1986). Developing basic conversational ability in a second language: A case study of an adult learner of Portuguese. In R. R. Day (Ed.), *Talking to learn: Conversation in second language acquisition* (pp. 237-326). Rowley, MA: Newbury House. Retrieved from <http://www.nflrc.hawaii.edu/aboutus/schmidt/>
- Shoab, A. & Dörnyei, Z. (2004). Affect in lifelong learning: Exploring L2 motivation as a dynamic process. In P. Benson & D. Nunan (Eds.), *Learners' stories: Difference and diversity in language learning* (pp. 22-41). New York: Cambridge University Press.
- Umino, T. (2004). Learning a second language with broadcast materials at home: Japanese students' long term experiences. In P. Benson & D. Nunan (Eds.), *Learners' stories: Difference and diversity in language learning* (pp. 134-149). New York: Cambridge University Press.